

〔巻頭言〕

看護実践研究を公表する意味

地域基礎看護学領域（紀要編集委員）藤澤まこと

本学は平成12年の開学時より、県内の保健・医療・福祉サービス利用者を中心とした看護の質向上を目指し教育・研究活動を推進している。その中で本学教員は、共同研究として、看護実践現場の看護職者と協働し当該施設の看護実践の改善・改革を目指す看護実践研究に取り組んでいる。また平成16年度に開設された大学院看護学研究科の大学院生も、入学時より自施設の看護実践の改善・改革を目指して看護実践研究に取り組んでおり、本学では継続して看護実践研究の実績を積み重ねながら、看護実践研究の特質の明確化に向け検討している。

岐阜県立看護大学紀要は、本学教員の教育・研究活動の実績を公表する貴重な場となり、今年度18巻の刊行に至った。投稿論文においても、本学の教育・研究活動の発展とともにその実績が積み重ねられ、充実した内容となっている。そして13巻より本学の大学院修了者による修士論文の投稿を受け付け、18巻までの6年間に掲載された修士論文は、原著16編、研究報告9編、資料2編となり、看護実践研究の成果が研究論文として確実に公表されていることは大変喜ばしい。

ここで看護実践研究を研究論文として公表する意味について考えてみたい。大学院博士前期課程における修士論文では、学生は自施設の看護実践の改革を推進し、利用者中心のケアのあり方を追究した研究成果を著している。具体的な研究的取り組みとしては、所属施設の保健・医療・福祉サービス利用者のニーズを基盤として多角的な現状分析を行い、看護実践上の課題を明確にし、看護職者間で協働して課題解決に向けた方策を考案し試行する。その成果・課題を明確にし、方策を改善する。修士論文ではその研究プロセス、取り組みの成果・課題、看護のあり方を検討した考察内容等が詳細に著されている。看護実践研究の場合、複数の研究方法が同時進行で進められる場合が多い。また研究期間は約3年間に及び、長い研究プロセスの中で得られるデータは膨大な量となり、内容も多岐にわたる。数十枚にわたる修士論文を、限られた紙面の投稿論文として著

すには、研究プロセスを途中で分割・再構成し、内容も再考することが余儀なくされる。研究プロセスの分割により、当該修士論文の独自性・新規性を読み取ることが難しくなってしまう場合もある。しかし看護実践研究においては、複数の研究方法が複雑に絡みあって取り組みが進められる中で、協働した看護職者の意識の変革が図られるとともに、組織的取り組みへと発展し、当該施設の看護実践の質向上につながる。したがってそのプロセスや成果の詳細を一貫した形で投稿論文として著すことができれば、さらに価値ある知見の公表につながると考える。

次に本学教員が取り組む共同研究の取り組みを研究論文として投稿する意味を、投稿者の立場で考えてみる。筆者は開学2年目より本学教員として共同研究に携わり、現地の看護職者と協働で看護実践研究に取り組んできた。利用者ニーズを基盤とした看護実践の質向上に向け看護職者の人材育成の方策を開発する4年間の共同研究の投稿例を取り上げてみると、1年ごとに取り組んだ共同研究を、4年間の一貫した取り組みとして見通したときに、その成果がより明確になった。まず4年間の取り組み内容の積み重ねにより人材育成の方策が明確となった。そして取り組みの評価により、看護職者の実践内容の変化や意識の変化、委員会組織の充実等が明確となり、看護実践の発展が可視化された。さらに当初は大学教員主体で行われた取り組みが、現地看護職者主体の自律した組織的取り組みへ発展した過程が明確となった。共同研究は、1つ1つの研究が看護実践現場の複雑な事象を捉え、現地看護職者と大学教員が協働で利用者ニーズに対応するために試行錯誤しながら進める看護実践研究であり、その公表は看護実践の知として価値あるものとする。

そして数多くの看護実践研究が研究論文として洗練された形で公表されることは、看護学に価値ある知見が加わるとともに、看護実践研究のあり方の追究に寄与できると考える。